平成 29 年度

教職員サマーセミナー実施報告書

豊かな発想を地域に、新たな知を世界へ　宇都宮大学

平成 30 年 1 月

宇 都 宮 大 学 教 職 セ ン タ ー

栃 木 県 総 合 教 育 セ ン タ ー

はじめに

宇都宮大学と栃木県総合教育センターの共催となって 2 年目，今年度も多数の先生方にお申し込みをいただきました。申込数としては昨年度を上回る 607 人でしたが，実参加者数は昨年度を若干下回る 469 人（一講座当たりの平均 39 人）でした。ここ数年，道徳教育や，発達障害を含む特別支援教育に関する講座などが人気があります。現場の先生方が常に新たな課題の解決や次の時代への対応について，主体的に学ぼうとされている姿が浮かび上がってきます。初任研や節目の研修の一環でない受講者の割合が 4 割であることも，このセミナーの特色であり，存在意義でもあります。

講座の内容について，アンケートによると受講者の 97%が満足（とても満足＋やや満足）と回答しており，このセミナーの意義を認めていただいていると喜んでおります。

平成 29 年 3 月に幼稚園教育要領と小中学校の学習指導要領が告示されました。「主体的・対話的で深い学び」，「カリキュラム・マネジメント」など，学校や教師が考え，学び，変わる必要が増しています。また，平成 29 年 8 月 29 日に出された「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて―国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議報告書－」では，大学の改革とともに，現職教員の研修について大学と地域教育界との連携が一段と強調されています。

私たち大学教員には，学校現場や現職教員へのこれまで以上に深い理解と，現場との協働による課題の把握と解決への努力が必要です。大学と教育委員会（総合教育センター）が共催するこのサマーセミナーのような研修機会は，私たち講師を育てる機会でもあるのです。今後も，自らも真摯に「学び続ける教師」となる努力を続けてまいります。

予算面では，共催と言うことで，事業費の約半額を栃木県に負担していただいております。厳しい財政状況の中，大学と地域教育界との連携の意義についてご理解をいただきました関係各位に，深く感謝申し上げます。

栃木県教育委員会，栃木県総合教育センターをはじめ，皆様のより一層のご指導・ご鞭撻をいただけますよう，よろしくお願い申し上げます。

なお，予算等の事情で昨年度からこの報告書は冊子体での刊行をやめ，Web 上のみでの公開としております。ご理解いただければ幸いです。

平成３０年１月

宇都宮大学教職センター副センター長（地域連携部門長）

松本　敏

目　次

【 １ 】講座名：森鴎外の歴史小説を読む 1
講　師：守安　敏久
【 ２ 】講座名：特別支援教育における ICF 支援シート活用 2
講　師：池本　喜代正
【 ３ 】講座名：楽しみながら学ぶ小学校理科 3
講　師：南　伸昌
【 ４ 】講座名：たのしい音楽授業のための鑑賞教育のポイント 4
講　師：平井　李枝
【 ５ 】講座名：アクティブ・ラーニング実践 5
講　師：皆川　純男
【 ６ 】講座名：発達障害児へのアセスメントと個別支援..... 6
講　師：原田　浩司
【 ７ 】講座名：発育期における体育・スポーツ指導のあり方..... 7
講　師：加藤　謙一
【 ８ 】講座名：アジアのかたち・日本のかたち～漆　japan
－伝統漆芸技法　沈金による表現　ワークショップ－ 8
講　師：松島　さくら子
【 ９ 】講座名：体ほぐし　心ほぐし　関係ほぐし（その４） 9
講　師：茅野　理子
【１０】講座名：思考力を育てる算数・数学の授業を考える １０
講　師：日野　圭子
【１１】講座名：「特別の教科　道徳」の授業の教材と発問..... １１
講　師：和井内　良樹　上原　秀一
【１２】講座名：異文化理解の教育を考え、創る：講義とワークショップ １２
講　師：丸山　剛史　森田　香緒里

附１：「平成２９年度教職員サマーセミナー」アンケート １３
附２：「平成２９年度教職員サマーセミナー」アンケート集計 １５

【 １ 】講 座 名：森鴎外の歴史小説を読む
講　　師：守安　敏久
実 施 日：平成２９年７月２１日（金）
会　　場：地域連携教育研究センター２階５Ｃ２１教室
受講者数：９名

Ⅰ．講義の趣旨

この講義では、明治天皇の死への乃木大将の殉死を契機として鴎外が書き継ぐことになる一連の歴史小説を読み進み、鴎外の文学的な方法と思想の考察を試みた。

テキストとしては森鴎外『山椒大夫・高瀬舟』（新潮文庫、昭 43、平 18 改版）を用い、そのうち「興津弥五右衛門の遺書」「護持院原の敵討」「山椒大夫」「最後の一句」「高瀬舟」、以上の五つの短編歴史小説を扱った。

これらはすべて典拠となる歴史史料あるいは説話が存在する。その史料あるいは説話を受講者にプリント配布し、典拠との比較を通して、作家・森鴎外が史料を「小説」へと立ち上げていく創作の手法を見ていった。

Ⅱ．講義内容

「興津弥五右衛門の遺書」（初稿『中央公論』大１・10、再稿『意地』所収・大２・6）は、主君に命じられて長崎に茶事の香木を求めに行った興津弥五右衛門が、購入をめぐって口論となった同僚を殺してしまうが、主君に命を助けられ、その後主君の死に殉じて切腹する顛末を遺書形式で綴った作品である。「総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」という功利を超える価値観の提示、そして主君の命令の是非を臣下がどう判断するかという点が、鴎外なりに問題提起されている。

「護持院原の敵討」（『ホトトギス』大２・10）は、金を盗みに入った亀蔵に当主を殺された山本家の嫡子たちが、敵討の許可を得て、全国を尋ね歩き、ついには本願を遂げる物語である。この作品は『山本復讐記』を典拠としている。嫡男・宇平が亀蔵探索の途中で行方知れずとなるが、その直前に宇平が敵討の徒労感とむなしさ、敵討という慣習への懐疑を漏らす場面が鴎外作品では創作されている。敵討の成功物語として綴られる典拠版に鴎外は懐疑を差し挟み、封建的慣習への両義的立場から創作されている。

「山椒大夫」（『中央公論』大４・10）は、周知のごとく「安寿と厨子王」の物語である。山椒大夫に買われて奴婢扱いを受けた姉・弟のうち、姉・安寿はわが身を犠牲として（入水自殺）、弟・厨子王を逃がす。厨子王は都で出世し、国守となって丹後の山椒大夫のもとに赴き、人の売買を禁じ、奴婢を解放。さらに佐渡へ渡って、盲目の母と再会する。この作品は説経節「さんせう大夫」がもとになっているが、鴎外が直接典拠としたのは、『徳川文藝類聚』（国書刊行会、大３）第８巻「浄瑠璃」所収の近江屋久兵衛版「さんせう太夫」（寛永本を享保 10 年に復刻）である。典拠では弟・厨子王を逃がしたあと、姉・安寿は山椒大夫に拷問されて死に至るが、鴎外作品では山椒大夫に囚われる前に安寿は自ら入水自殺を選ぶ。また典拠では国守となって丹後に赴いた厨子王は、罰として山椒大夫と三郎を処刑するが、鴎外作品では奴婢を解放した後、給料制としたため、山椒大夫はかえって繁栄する顛末となっている。鴎外は因果応報・勧善懲悪の復讐譚を排し、姉・安寿の自己犠牲のドラマを主軸化していったといえよう。

「最後の一句」（『中央公論』大４・10）は、死罪と決まった父の身代わりとして自分たちの命を差し出して父の放免を願い出た幼い兄弟姉妹の物語であり、「献身の中に潜む反抗の鋒」が作品の主題である。

「高瀬舟」（『中央公論』大５・１）は、遠島の罪を負って高瀬舟で護送されていく罪人・喜助の身の上話に同心・羽田庄兵衛が聞き入る話である。鴎外は〈財産と云うものの観念〉、〈ユウタナジイ（安楽死）〉という二つの問題を取り出して主題化している。

Ⅲ．講座の自己評価と受講者のようす

特に「山椒大夫」をめぐっては、山椒大夫を処罰する典拠版の展開と、給料制としたため、山椒大夫がかえって繁栄する鴎外版の顛末について、因果応報・勧善懲悪の典拠版を支持するか、理性的な制度改正の鴎外版を支持するかで、受講者からそれぞれに意見が出された。「安寿と厨子王」の物語として知られているだけに、題材の選択において、親しみを持たれたようだ。

【 ２ 】講 座 名：特別支援教育における ICF 支援シート活用
講　　師：池本　喜代正
実 施 日：平成２９年７月２４日（月）
会　　場：地域連携教育研究センター２階５Ｃ２１教室
受講者数：３１名

Ⅰ．講義の趣旨

本講座では、特別支援教育に関する国際的動向および国内の動向を踏まえた上で、ＷＨＯから 2001 年に出された ICF（国際生活機能分類）による障害観・教育観について理解を深める。そして、個別の指導計画作成に有効な ICF 支援シートの書き方、活用方法について、具体的な例を挙げて、演習を行う。国際生活機能分類（ICF）の理念を理解して、障害の捉え方や対応方法について多角的に考える視点を育てることを目的としている。

Ⅱ．講義内容

第 1 部　ICF に関する解説

この講義においては、障害の概念について参加者に考えてもらい、そのあと WHO の ICIDH の考え方と ICF の考え方について、具体的な例を挙げて説明した。ICF の有効性について理解をしてもらった。また、ICF のコーディングの仕方や評価点について説明を行った。

第 2 部　ICF 支援シートと特別支援教育

複数の発達障害児の事例を基に、ICF 支援シートをどのように書いていくかを検討した。その支援シートから個別の指導計画作成を行い、目標設定や手立ての方策について議論した。そして、子どものニーズを考えた目標設定のありかた、また獲得すべきスキルを身につけさせるための手立てについて考える機会を与えた。

第 3 部　ICF による事例検討

特別支援学校小学部 4 年生の自閉症児のビデオを視聴し、この子どもの ICF 支援シートの書き方を PP 資料に基づいて説明をした。記入する段階で、参加と活動の違い、書き方などのサジェスチョンを与えた。

支援シートの活用事例として、受講者がそれぞれ実際に担当している子どもについて ICF 支援シートを書いてもらった。そして、代表の方に例を黒板に書いていただき、それをもとに書き方について学ぶとともに、目標設定や支援の手立てについてそれぞれ発表してもらった。

この方法は、校内支援委員会で使用できるカンファレンスのやり方であり、学校現場で有効な方法であると考える。特に特別支援教育コーディネーターのような役割の人にとっては不可欠なスキルとなろう。

Ⅲ．講座の自己評価と受講者のようす

今回の受講者は、特別支援学校教員が 16 名、小学校教員 10 名、中学校教員 3 名、高校教員 2 名であった。受講後のアンケート（回収数 31 通）では、「とても満足」が 25 名（80%）、「やや満足」6 名（20%）であり、具体的な感想としては、「個別の指導計画を作成する際に、活用できそうな内容だった」「ICF 支援シートについての説明と VTR の問題提起の話題を踏まえてくださり、わかりやすかった」、「話が聞きやすく、やりとりのキャッチボールができ、とても好感が持てたから」、「日常では勉強できない専門的なこと、実践できそうなことを学ぶことができました」などが挙げられていた。事例として検討した 2 ケースを通して、自分の担当する子どもの様子が共通する点も多かったようで、目標設定の仕方や手立てなどが参考になったという意見や、個々のニーズから指導方針の立て方、そして指導の流れがわかった等の感想が寄せられた。

ICF について詳しく知らなかった方が少なくなかったが、今回の講習を経験して ICF の考え方の重要性と、学校教育現場においても活用できるものであることを認識していただけたと思われる。受講者の評価は、良好であった。



【 ３ 】講 座 名：楽しみながら学ぶ小学校理科
講　　師：南　伸昌
実 施 日：平成２９年７月２５日（火）
会　　場：８号館Ｃ棟３階　理科教育学学生実験室
受講者数：１３名

Ⅰ．講義の趣旨

小学校教員自身が、まずは理科の不思議さ・楽しさを感じ、身近な現象や素材を扱うことで、理科という学問の位置付けを再認識することをねらいとした。

Ⅱ．講義内容

Ａ．［化学分野］金属、水、空気と温度

・逆流の実験
・水は何度で沸騰する？

気体は目に見えないので、大人でも水蒸気を空気として認識していることも多い。水蒸気を充満させた丸底フラスコに水を逆流させることにより、フラスコ内の全空間が水蒸気で満たされていたということを実感した。

実験室で水を沸騰させても、水温は 97℃くらいで止まり、100℃にはならない。これは温度計の用い方によるものであることを説明し、100℃になる測定方法を紹介した。

Ｂ．［化学分野］水溶液の性質

・酸性、アルカリ性とは？
・身の回りの指示薬

酸・アルカリは水溶液中の物質の安定性を決める性質であり、水は pH7 の溶液であるという視点を与え、「水溶液」の見方の幅を広げた。また、水溶液の pH による二酸化炭素の吸収／放出を演示実験で示し、「物質の安定性を決める性質」についての理解を深めた。

また、お茶やジュースを用いて、酸性・アルカリ性で色が変わるのは、着色溶液一般の性質であることを示した。身近な素材を用いた教育効果の高い実験の例として、紫芋粉末を指示薬とした液性調査法を紹介した。

Ｃ．［化学分野］ものと重さ

・鉄 1 kg と綿 1 kg、どちらが重い？
・超軽量天秤の作成

金属類 500 g と綿などかさばるもの 500 g を実際に持ってもらい、同じ重さでも明らかに金属類の方が重く感じられることを実感し、誤概念には根拠があることを認識してもらった。

もう一つの誤概念対策として、小さいものでも重さがあることを簡便に示すために、超軽量天秤を紹介した。各自で作成し、学校で活用できるようにした。

Ｄ．［物理分野］振り子

・振り子の運動

教科書では近似にとらわれるあまり、必然的に出てくる計測差も誤差にねじ込まれる流れとなっている。その理屈を簡単に説明し、実際に実験を行い、理屈通りに差が生じることを確認してもらった。

Ｅ．［物理分野］電気の利用

・発電・電気の変換
・蓄電・放電
・電気の利用

手回し発電機、半導体素子（ＬＥＤ、電子オルゴール）、モーター、コンデンサーの動作・性能について、実際に活用することにより理解を深めた。また、ペットボトルを利用した風力発電装置や備長炭電池の工作実験も行い、自由研究も含めた活用例を紹介した。

Ⅲ．講座の自己評価と受講者のようす

小学校ということで、ほとんどが理科以外の専科の教員であった。振り子の原理などは少々難しいところではあるが、要点だけをつまむことにより、それほどストレスなく理論と実験の照合を実感できたようだ。全体を通じて、スーパーやホームセンター等で入手可能な素材の活用例を紹介したので、参加者自身の理科に対する障壁が低くなり、満足度も高かったように思う。教員は、自分の専門以外に目を向ける機会はあまりないので、こういった機会に理科に対する興味関心を高められるよう、引き続き工夫を重ねていきたい。

【　４　】講 座 名：たのしい音楽授業のための鑑賞教育のポイント
講　　師：平井　李枝
実 施 日：平成２９年７月２５日（火）
会　　場：７号館２階　音楽ホール
受講者数：２６名

Ⅰ．講義の趣旨

本講座では、小学校、中学校、高等学校の音楽授業の構成要素となる「鑑賞」に焦点をあて、その授業方法について研究することを目的としている。さまざまな音楽鑑賞教材を用い、児童生徒が興味をもって鑑賞するには、どのような視点で授業を行ったらよいか、講師による生演奏を交えながら、わかりやすく、たのしい音楽授業を目指すために、アプローチの方法、ワークシートの作成方法など教育現場で役立つポイントについて講義を行った。受講者には子どもの立場に立って音楽鑑賞について考えていただき、グループワークなどアクティブラーニングを用い、問題点について受講者間で共有し解決法について探求した。

Ⅱ．講義内容

①受講者による自己紹介と音楽鑑賞についての日頃の取り組み、悩みについての共有

受講者の所属は、小学校 16 名、中学校 3 名、高等学校２名、特別支援学校４名、盲学校１名であった。音楽鑑賞の方法について、どのような観点で授業を行い、評価したらよいのか、悩み苦手意識をもっていることが明らかになった。音楽鑑賞に対する子どもの感想の語彙が乏しいことに悩みを感じている受講者も多かった。

②子どもの目線で音楽鑑賞体験

①で最も多かった「何も情報を与えず音楽を聴かせ、題名をあてたり感想を書かせたりする」という授業法について、受講者が子どもの立場で体験してもらうため、講師の生演奏により音楽鑑賞を行った。その結果受講者たちは自分自身が想像以上に何もできないことに驚き「私たちは子どもたちになんと過酷なことをさせていたのか」と反省しきりであった。さらにペアワークによりお互いの感想を採点することも行った。

そこで、
・鑑賞のポイントについての様々な方法の具体例の紹介
・視覚教材の役立て方の具体例の紹介
など様々な音楽鑑賞の方法について講義と実演を行い、受講者に体験してもらい、比較してもらった。

③音楽鑑賞の感想文の採点、評価法について

②での受講者の反省を活かし、音楽鑑賞に関する感想文の採点方法、評価の観点、方法について、講義と受講者による討議を行った。

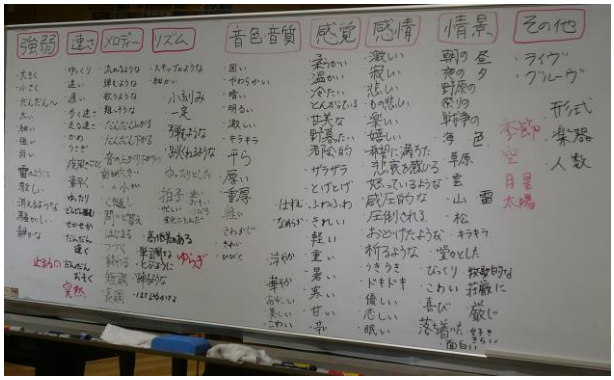


④授業に役立つワークシートの作成

受講者それぞれの校種に合わせ、鑑賞の授業で使用するためのワークシートを作成した。子どもたちが書きやすく、教師が評価しやすいワークシートを目標にした。完成したところで、受講者を６人ずつのグループに分け、各自作成したワークシートについてグループ内で発表を行い、さらに改訂した。

⑤音楽鑑賞に関するキーワードの収集

①で明らかになったように、受講者は一様に「子どもたちの語彙力の乏しさ」について悩みを抱えていた。そこで、講師から音楽鑑賞に関するキーワードをたくさん書き出すという課題を与えた。個人で課題に向き合った時、全くキーワードが思い浮かばない受講者が多数見られたため、グループワークとし、最終的に受講者全員でたくさんのキーワードを共有することに成功した。



Ⅲ．講座の自己評価と受講者のようす

子どもの立場で授業を考えることにより、自分自身で問題点を探求することができたようである。さらに、受講者同士で悩みを共有できたこと、講師の生演奏により音楽鑑賞できたこと、また、授業ですぐに活用できる教材を作成できたことが好評であった。

【　５　】講 座 名：アクティブ・ラーニング実践
講　　師：皆川　純男
実 施 日：平成２９年７月２８日（金）
会　　場：ＵＵプラザ　２階
受講者数：２７名

Ⅰ．講義の趣旨

アクティブ・ラーニング（以下ＡＬ）について、その導入の背景や意義について理解を深める。

ＡＬ型授業の具体的な方法を体験的に学び、生徒が居眠りしないでいきいき学ぶ、そんな授業に改善するきっかけを見いだすこと。

Ⅱ．講義内容

講座を、以下の５つの授業の形式で行い、受講者の先生方に生徒の立場になってＡＬ型授業を体験していただいた。

講義１「新学習指導要領のねらい」10:00～10:50
(1) 新学習指導要領の総則を読み、その内容及び要点を理解する。
(2) 新しい時代に求められる資質・能力を把握し、高校の授業の現状と課題について考察する。

講義２「ＡＬ型授業の実践(1)」11:00～11:50
(1) ＡＬの定義、ＡＬ型授業の構想、ＡＬの具体的な手法について理解を深める。
(2) ＡＬを推進する上で、教員の話し方や説明・指示・指名の仕方、発問の工夫、机の配置などが極めて重要であることから、これらのポイントについて再確認する。

講義３「ＡＬ型授業の実践(2)」12:50～13:40
(1) ＡＬの具体的な進め方について、様々な技法を学び、授業改善のヒントやきっかけを得る。
(2) 「ＡＬの視点からの授業改善のための授業参観シート」※をもとに、自己の授業を振り返る。
※一部例
①生徒に力をつけるために適切で、評価可能な目標が明確に示されていましたか。
②「教師の説明と生徒の活動」や「個人で考える時間と集団で考える時間」がバランスよく組み込まれていましたか。
③適切なアウトプット(表現)活動が事前に予告された上で行われていましたか。
④生徒は主体的・協働的に取り組んでいましたか。
⑤説明や指示が明確で、生徒の思考や意欲を促す発問が行われていましたか。
⑥本時の目標に沿った、適切な振り返りが行われていましたか。

講義４「ＡＬの成果と課題及び学習評価」13:50～14:40
(1) ＡＬ型授業の成果と課題について考察し、ＡＬ型授業を推進する上での留意事項を確認する。
(2) 評価の目的や学習評価の在り方、高校教員の評価観について理解を深める。

講義５「振り返り(リフレクション)」14:50～16:00
(1) 本日の講座で「印象に残ったこと」「わかったことや気づいたこと」「これからやろうと思ったこと」等について、各自がワークシートに記述する。
(2) ４～５人のグループを作って意見交換を行い、本日の講座全体の振り返りをする。

Ⅲ．講座の自己評価と受講者のようす

受講者は、ＡＬ型授業への取り組みが最も遅れているといわれている高校教員を対象にした。講義１～４では、随所に個人ワーク、ペアワーク、グループワークを取り入れたところ、受講者の先生方は生徒の立場になって積極的に取り組み、ＡＬを体験的に学ぶことができたようである。また、講義５では、大変活発な意見交換が行われ、お互いの「気づき」を広げ高めていた。

以下、アンケートに書かれた主な記述を紹介する。

① ＡＬの原理や意義、必要性を実感することができる講義内容だった。
② ＡＬを実際にどのように取り入れたら良いのか分かりませんでした。今回のセミナーを受講し、ペアワーク、グループワーク等の方法を学べたので、これからの授業に生かしていきたい。
③ 自分の教師としての在り方を再確認することができました。生徒への向き合い方、生徒とのやり取りがしっかりできていれば、授業はうまくいくように思います。また、教材研究をどれだけ充実させるか、どのような問いや対話を取り入れるかを吟味することをいつまでも続けていきたいと思います。
④ 授業の準備の仕方から、発問の仕方、説明するときの注意点、生徒の指名の仕方など、具体的な指導方法を学び、自分の足らなさを自覚することができました。

【 ６ 】講 座 名：発達障害児へのアセスメントと個別支援
講　　師：原田　浩司
実 施 日：平成２９年７月２８日（金）
会　　場：大学会館　多目的ホール
受講者数：９８名



Ⅰ．講義の趣旨

特別支援教育の理念を正しく理解するとともに、通常学級に在籍する発達障害児へのデータに基づいたアセスメントと教育的な支援について体験を通して理解することができる。

欧米のアセスメントと支援の実際を理解し、日本の特別支援教育の在り方について考えることができる。

Ⅱ．講義内容

A.　　ＤＶＤ視聴「イギリスのディスレキシア（読み書き障害）対策」

欧米の実態を理解することで、日本の置かれた問題点について考える。イギリスで行われているディスレキシアに対する教育支援から科学的なデータと専門家の存在の重要性を理解する。

B.　日本で取り組める読み書き障害児へのアセスメント

１．「ＭＩＭのアセスメント」の紹介
（１）ＭＩＭのアセスメントとは
（２）読みの流暢性の重要性
（３）通常の授業の中で活用できる
（４）東京書籍の国語教科書に採用された意義
（５）多層指導モデルの有効性
（６）多くの市全体で採用されている実態
（７）ＭＩＭの活用法について体験する。

２．発達性発達障害：診断・治療のための実践ガイドラインの紹介
（１）信頼できるアセスメントの理論
（２）実際の手順について体験的に理解する。
「読み」の苦手な子の発見が遅れると、学習全般の理解が遅れ、結果的に二次障害に陥るケースが増えている。そうした事態を招く前に低学年から実施できる検査方法を活用することが有効である。「読み」を４つの方法で計測し標準からの差を計算する手順を学ぶ。

３.アセスメントから支援の方法の紹介（ＩＣＴ活用）
（１）「読字トレーニング」「ビジョントレーニング」
視知覚や眼球運動に課題がある場合に活用する。
（２）「マルチメディア：ＤＡＩＳＹ」
単語や文節読みの苦手な場合に活用する。
（３）「ＷＡＶＥＳ」
視知覚に課題のある子へのアセスメントと指導ツールとして活用する。



Ⅲ．講座の自己評価と受講者のようす

受講者には小・中学校以外にも高校や特別支援学校の教員が熱心に研修し、特別支援教育の関心の高さを痛感した。

具体的なアセスメントの手順や指導例を示したことで、教育現場で活用したいというアンケート結果も多数あった。３年連続で申込者数が 100 名を超え、通常学級におけるアセスメントや支援方法についての研修意欲の広がりが見られた。今後は、特別支援教育の科学的データに基づいた有効な支援についての一層の資質の向上が望まれる。

【　７　】講 座 名：発育期における体育・スポーツ指導のあり方
講　　師：加藤 謙一
実 施 日：平成２９年７月３１日（月）
会　　場：地域連携教育研究センター2 階 5C21 教室　及び　第一体育館
受講者数：３１名

Ⅰ．講義の趣旨

近年の子どもの体力低下や教育に関わる問題点をあげながら，就学前から小学校の子どもの体育やスポーツ指導の意義について理解する。そして、実技を通して児童期における体育や運動指導の方法について具体的に学ぶことをねらいとする。

Ⅱ．講習内容

講習は、講義、教具作成および実技で構成した。講習に先だって受講生の自己紹介（名前、所属および受講理由などを簡単に）を行った。

【講義】

１．現在の子どもの運動能力について
・体育の日の新聞記事からみた現状について
・現代の子どもの遊びについて

２．運動発達の概要
１）スキャモンの発育曲線からみた運動発達の特徴
①身長の発育
②骨格の発育
③体重の発育
④筋と筋力の発達
⑤エネルギー代謝と最大酸素摂取量の発達
⑥神経・筋コントロール能力の発達
２）児童前期（6～8 歳）の運動発達
・運動のやり方の洗練化と多様化
３）児童後期（9～12 歳）の運動発達
①身体の調和的発達
②運動の意識的な制御
③即座の習得
４）思春期前期の運動発達
①PHVA
②思春期不器用
５）思春期後期の運動発達
６）発育発達に応じたトレーニングの考え方
７）運動とパーソナリティの関係
８）小学生のスポーツ活動のあり方について

３．運動観察の意義と観察学習の必要性
・VTR の観察による運動の見方
①前転と走運動の動画を取り上げて上手な子とそうでない子の比較
②運動観察のポイント
③運動観察力の重要性
④運動観察を活かした指導と評価
⑤観察学習の意図するもの

【教具作成】

４．簡単な運動用具の作成（手作りフライングディスク）

厚紙、古新聞、布カラーテープを使って手作りのフライングディスクを作成した。

折り紙鉄砲を作成した。

【実技（簡便に実施できるものを紹介した）】

５．「多様な動きをつくる運動（遊び）」に関わる運動教材

午前中で作成したフライングディスクを使った運動（準備運動、体つくり運動、各運動領域に関わる事例：距離、二人組キャッチ、二人組遠投ディスクキャッチなど）を紹介しあった。

６．運動を教材化する方法（走、跳、投運動の指導）
①スタートダッシュの指導ポイント：スタンディングスタートの指導の仕方
→（キック足の見つけ方、地面を蹴るための適切な膝の角度の見つけ方など）
子ども一人一人に見合った方法について
→腕振り、スキップ、ギャロップなど
②全力疾走の指導ポイント：制限走を用いたアドバイスの仕方
③立ち幅跳び、走り幅跳びの指導のポイント
・助走距離や着地動作
④ボーテックスを使った投動作の指導ポイント
・長座姿勢、立ち膝姿勢、サイドステップ投げ
・的当てゲーム
・タオルを使った投動作（腕の振り方）のポイント
⑤指導内容と評価の観点について

実技指導のなかで体育における評価の考え方について解説を行った。

７．総括および受講者の質問への回答など

Ⅲ　講座の自己評価と受講生の様子

受講生 31 名は全て午前午後の講習に積極的に取り組んでいた。そのうち 15 名が初任者研修、4 名が 2-5 年目研修、7 名が中堅教員研修、5 名が区分外の教員であった。彼らの様子からは講習内容を実際の授業に役立てたいという意気込みが感じられた。またいずれの教員も、自校の体育学習のヒントを得ることを期待しているようであった。

講習では質問や疑問事項を積極的に出してもらった。そのことから本講座内容への興味・関心が強いことが感じられた。また、午後の実技では館内（36 度）の蒸し暑い状況であったにもかかわらず、参加者全員が積極的に実技に取り組んだ。

【 8 】講 座 名:アジアのかたち・日本のかたち～漆 japan
-伝統漆芸技法 沈金による表現 ワークショップ-

講　　師:松島　さくら子
実 施 日:平成29年7月31日(月)
会　　場:8号館A棟1階 図画工作室
受講者数:24名

Ⅰ.講義の趣旨

栃木県は陶芸・竹工芸など全国でも工芸の盛んな県であるが、変化する時代の中、日本の伝統文化や伝統工芸に接する機会が少なくなってきているのではないか。漆工芸を通し、日本の伝統文化を理解し、さらに日本やアジア諸外国の芸術文化に興味を深め、一生涯にわたり愛好できるよう指導に繋げてもらいたいと考え講義とワークショップを設定した。

Ⅱ.講義内容

日本やアジアの工芸を紹介する **A.講義**と、**B.ワークショップ**として、日本の伝統漆芸技法である沈金による平面表現を行った。

A.講義

日本やアジアの工芸にはどのようなものがあるのか概観し、宇都宮大学で取り組んでいる工芸授業の題材を紹介した。漆工芸は、かつて椀や箸、膳や重など、どこの家庭でも使用していたはずであるが、食生活や生活様式の変化に伴い、使用が極端に減少している。栃木県内では漆を植林し、漆掻きも行なわれており、良質な漆が産出されている地域の現状も含め、漆という素材の特性や現状についての講義を行なった。

1. 工芸のなりたちと、工芸という言葉
a.人間の体（手）と道具
b.用の美
c.「工芸」という言葉にはどのような意味が込められているのか。

2. 「漆」とはどのような材料なのか?
a.漆工芸の歴史
b.漆液の特徴と応用
c.漆の表現とその可能性

B. ワークショップ

沈金は漆芸の加飾（装飾）技法であり、漆の塗面に文様を彫り、漆を摺り込んで金箔や金粉などを蒔き、拭きとることで、その彫った部分にのみ金銀粉による文様が浮かび上がって見える表現である。中国では鎗金(そうきん)と呼ばれ宋代から行われていた技法で、室町時代には日本でも始められたとされ、近世以降、高度な発達を遂げた。

1. 12.5cm×12.5cm の黒漆塗りパネルに文様(デザイン)を転写する。
2. 沈金刀(初心者ワークショップ用に独自製作したもの)で点・線など自在に彫れるよう試し彫りを行ってから、黒漆塗りパネルに彫りを行う。
3. 薄く漆を塗布する。
4. 金粉(純金，青金，銀)を真綿を使用し巻きつける。
5. 余分な金粉を拭き取り完成

Ⅲ.講座の自己評価と受講者のようす

受講者には事前に、黒漆塗りパネルに線彫りや点彫りを施すと想定して、図案の構想(下図)を持参するよう通知していたので、スムースに作業を進める事ができた。

対象者は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員であり、中には学校での図工や美術の授業に応用できるような材料や内容を考えてほしいなど、意見があった。

彫金や染織など様々な題材を取り上げ毎年開講してほしいとの要望もあがり、受講者の評価は良好であったと思われる。

【　９　】講 座 名：体ほぐし　心ほぐし　関係ほぐし（その４）
講　　師：茅野　理子
実 施 日：平成２９年８月３日（木）
会　　場：第２体育館
受講者数：２２名

Ⅰ．講義の趣旨

体や心の緊張をほぐすとともに人間関係の緊張をほぐす様々な「遊び」の実践 ── 今回は、「その４」として、改めていまの自分に気づくことで心と体を調え、他者に気づき、他者との関係を築いていくことを目標とした。「体ほぐしの運動」やアイスブレーキングに応用できる内容例を多く実践するとともに、参加者が指導している対象に合わせて教材を工夫できるよう、そのヒントを提示した。

Ⅱ．講義内容

１．自己紹介と本研修に期待すること

２．緊張をほぐし、豊かなふれあいを育む運動遊び・リズム遊び（理論）

最近の子どもは息が浅いと言われている。齋藤孝氏は、その息の浅さは、他者を受け入れる度量の浅さにつながると指摘している。緊張した時は息を詰め、安堵の瞬間ふーっと息を吐くことは良く体験していることであり、息は、「ほぐし」において重要な要素である。したがって、研修では、もっとも深い息である笑いや歓声が起こるような内容を紹介することに努めている。

一方、関わりにおいても、相手と息を合わせて動くことがよい関係を築く第一歩と言える。そしてそれは、リズムを合わせることにつながる。個々に存在する生命のリズムに端を発し、協調のリズムへ発展させるーダンス・ムーブメント・セラピーの根幹である。

本研修では、関わりやリズムを重視した「体ほぐしの運動」の典型教材、特に、特別な支援を必要とする子どもたちと共創したリズム遊びの教材例の紹介とともに、児童生徒に発信している自身の身体言語への気づきに働きかけながら各実践を行った。

内容構成に当たっては、以下のことを考慮して立案した。

（１）気づく
自分の体の歪みに気づく→その調整を含めて
（２）ほぐす
１）体をほぐす　２）心をほぐす　３）関係をほぐす
（３）あそぶ
１）真似して　２）ゲームで　３）見つけて

３．緊張をほぐし、豊かなふれあいを育む運動遊び・リズム遊び（実践）

以下、当日の実践内容を抜粋して紹介する（順不同）。
（１）自分の身体の歪みを知る実験いろいろ　【静】
（２）マッサージいろいろ　【静】
マッサージから「気」の受け渡しまで
（３）身近な物を使って
１）ゴミ袋風船
円形コミュニケーションからリレーゲームへ（グループで）【動】
２）新聞紙
①一人でキャッチ→2 人組で→グループで　【静→動】
②声のキャッチボール　【静】
③ペアを探せ！　【動】
（４）ペアになって
１）背中で会話　【静】
２）旅の記憶　【静】ブラインド・ウォークの相手にあわせて：言葉で指示→体と動きで対応
３）ミラーリング　【静】
（５）リズムに乗って
「簡単なリズムで連続するー止める」から「リズミカルに真似る・工夫する」まで
１）あなたの名前はなんですか？　【静】
２）リズムで応答　【静→動】
３）ロンドン橋落ちた→いろいろな橋をくぐろう【動】
４）出会いのダンス
（その１）「走るー止まる」単純なフレーズで　【動】
（その２）48 呼間の長めのフレーズで→ジャンケンゲームへの発展　【動】
（６）伝承遊び
１）リズムへびおに（グループ対抗）　【動】
２）キツネとガチョウ　【動】

４．研修を終えてー情報交換

Ⅲ．講座の自己評価と受講者の様子

22 名の受講者中、小学校教諭 11 名、中学校教諭 1 名、特別支援学校教諭 10 名であった。また、初任者研修 2 名、2－5 年目研修 4 名、中堅教諭等 6 名、男性教諭 7 名、女性教諭 15 名と、校種も年齢も異なる先生方が一堂に会して学び合う様子は、毎回のことながら熱心で意欲的な反応に支えられ、指導者にとっても有意義な研修となっている。

その間、「必ず 21 人に出会ってください」ということをルールとした。夏の一日、思いっきり笑って、いい汗をかきたいと願っての実践であった。積極的に動き　続けられた先生方に感謝したい。改めて指導者側が先　生方からパワーをいただいているのだと実感した研修であった。

多くの先生方から現場で使えそうな内容という感想をいただいた。この研修がそれぞれの実践で活きることを願いつつ…。

注）本講座の内容は、院生や内留生とともに行った教材開発や、全国授業研究グループ並びに各種ボディ・ワークでの講習内容をアレンジし、様々な教育現場等での実践を踏まえて、有効であったものについて紹介している。

【１０】講 座 名：思考力を育てる算数・数学の授業を考える
講　　師：日野　圭子
実 施 日：平成２９年８月９日（水）
会　　場：８号館Ａ棟２階８Ａ２１教室
受講者数：３０名

Ⅰ．講座の趣旨

本講座では，算数・数学科において，思考力育成に関わる研究の動向や新学習指導要領の動向を紹介し，数学的活動を授業に取り入れる視点や手立て，教師の役割について考察する。その際，講義だけでなく，グループワーク等も取り入れて進めていくことにより，受講者が，思考力を育てる授業の視点が多様であることを知り，自身の授業について振り返り，視野を広げる機会となるようにしたい。

Ⅱ．講座の概要

＜午前の活動＞

・　算数・数学での思考力とは？

受講者同士で，「算数・数学での思考力について思うこと」，「思考力を育てるためにどんな工夫があると思うか」について，自由に話してもらった。その後，数学的な推論としての帰納，類推，演繹について，算数・数学で大切にしたい見方・考え方について，また，問題解決のプロセスについて，新学習指導要領の観点を入れながら解説を行った。

・　思考力を育てる授業のために

「あなたならどういう授業をしますか」という問いを投げかけ，２つの授業について，受講者同士で，その後全体で，話し合う機会を持った。

１つは，小学校１年の「たしざん」の指導案の検討である。若手教員によって作成された指導案について，特に，授業のねらいについて，「めあて」を子どもに示すタイミングについて、授業の振り返りについて意見交換を行った。また，思考力を育てる上で，子どもの多様な考えを比較・検討することの重要性を確認した。

もう１つは，小学校６年の「分数のわり算」の発展課題による授業である。ここでは，子どもの反応を予想するとともに，実際の授業で子どもから出た予想外の解答について，どのように対応するかを話し合った。最後に行った「分かりやすい説明を各グループで１枚のホワイトボードにまとめる活動」では，割合がテーマとなっていたこともあり，受講者の間で活発な意見が交わされた。

＜午後の活動＞

・　授業の映像から，子どもの学びを捉える

午後は，２つの授業 DVD を視聴し，子どもの視点から「深い学び」について考えた。１つ目の映像は，小学校４年の「変わり方」の授業での A 児の様子である。A 児は，算数はそれ程得意ではなく，授業中も発言は少ない。その A 児が他の児童と関わり合いながら，算数の授業に参加している様子を見ることで，児童の学びをどう捉えることができるか，エビデンスを探しながら視聴した。

２つ目の映像は，中学校３年のトピック授業でのあるグループの様子である。規則の一般化をしていくグループ活動において，生徒が自分の考えをベースに，一般化ができるかどうかを例や反例をあげて議論していく様子を視聴した。

受講者からは，このような角度からの映像を見ることが新鮮であったという意見も出された。いつもとは違う目線で，深い学びについて考えることができたと思われる。

Ⅲ．今後に向けて

若手の教員が多かったこともあり、指導案を検討したり、予想外の子どもの反応に対する対応を考えたりと，日ごろの授業で経験している難しさや疑問にも重なる部分があるように配慮した。午後の活動では，子どもの視点から学びを捉えるというややチャレンジングなテーマを扱った。映像と関連情報をいかに受講者に分かりやすく，整理して示すかは，今後の課題である。

講座は概ね予定通りに行われたが，午後の活動では ICT を使ったため，途中でトラブルが発生し，活動を変更するハプニングもあった。次回に向けて，さらに授業を改良していきたい。

【 １１ 】講 座 名：「特別の教科　道徳」の授業の教材と発問
講　　師：和井内良樹、上原秀一
実 施 日：平成２９年８月１７日（木）
会　　場：８号館Ｃ棟２階大会議室、地域連携教育研究センター２階５Ｃ２１教室
受講者数：１２７名

Ⅰ．講義の趣旨

平成３０年度に小学校で、平成３１年度に中学校で、「特別の教科　道徳」（道徳科）が導入される。児童・生徒の道徳性の育成に向けて、道徳科の授業ではどのような教材を活用しどのように発問をしたらよいのであろうか。具体的な教材を使って、受講者にこれらの問題を考えてもらうこととした。小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年、中学校の各段階で用いられる代表的な教材を取り上げて、グループワークを中心とした講習を行った。

Ⅱ．講義内容

受講者を二つのグループに分け、２会場同時進行で２名の講師による講座を実施した。中堅教諭等受講者２７名と区分外受講者５６名には、第１会場で受講していただいた。初任者研修受講者３２名と２～５年目研修受講者１２名には、第２会場で受講していただいた。

１．小学校、中学校における道徳の授業づくりについて

和井内は、小学校、中学校における道徳の授業づくりの進め方と指導のポイントについて、配布資料及びプレゼンテーション資料を用いて講義を行った。

まず、全教育活動における道徳教育を、補充、深化、統合する道徳授業の「要」としての中核的な役割や児童・生徒が自分や人間としての生き方について考えを深める道徳授業の意義などを確認した。

次に、道徳科へ移行する道徳授業の特質を踏まえながら、道徳授業づくりの進め方や道徳教材（資料）の活用のポイント、発問のタイプの確かめや発問構成の仕方、効果的な板書の仕方、話合い活動の工夫やワークシートの活用など授業を盛り上げる多様なアイデアについて事例をもとに確認を行った。

最後に、道徳教材「星野君の２るい打」（吉田甲子太郎）、「泣いた赤おに」（浜田廣介）、「三枚の銀貨」（和井内良樹）を用いた実践事例を紹介した。その中で、道徳授業の基本的な展開やそれに対する児童の発言の受け止め方、児童・生徒一人一人としっかり教師が向き合うことなど道徳授業で大事にしたいポイントについて解説した。

２．グループワーク

和井内は、小学校１・２年生用教材「二わの　ことり」を読んで発問を考えるグループワークを行った。上原は、小学校３・４年生用教材「同じ仲間だから」と中学校用教材「みんなでとんだ！」を読んで発問を考えるグループワークを行った。いずれの教材も、差別や偏見に関わる道徳的事実を描いたものであり、「いじめ問題」に関連した内容を含んでいる。道徳の教科化の背景に「いじめ対策」があることから、今回の講習にふさわしい題材と考えて選択した。

上原が提示した「同じ仲間だから」は、文部科学省『わたしたちの道徳　３・４年』に掲載された教材である。同書における教材掲載のスタイルも、道徳授業の在り方との関連で講習における研究課題とした。また、上原は、「同じ仲間だから」と「みんなでとんだ！」に類似した道徳的事実を描いた小説を提示し、今後、道徳授業の教材開発に役立てる可能性を検討した。石田衣良『５年３組リョウタ組』（角川文庫、２０１０年）と重松清『青い鳥』（新潮文庫、２０１０年）である。

Ⅲ．講座の自己評価と受講者のようす

受講者は１２７名だった。アンケートを見たところ、受講者には概ね好評だったようだ。グループで協議し発表し合うことで各自の考えがより深まった、道徳教育の今後について見通しがもてた、日頃の指導に生かす具体的な手立てをつかめた、など、研修の成果を見取ることができる。

中には、グループでの協議の際、自分の校種と違うグループだったり、そもそも道徳授業について知識が少ない受講生同士の協議だったりで、苦心したとの声もあった。グループワークについて今後の課題として受け止めた。

平成３０年度には全面実施が決まっており（中学校は平成３１年度実施）、道徳授業づくりや進め方などについて、研修の要望も一層増えることが予想される。受講者の期待に応える内容やプログラムについてさらに検討を進めたい。

【１２】講 座 名：異文化理解の教育を考え、創る：講義とワークショップ
講　　師：丸山剛史（教育）・森田香緒里（教育）
実 施 日：平成２９年８月１８日（金）
会　　場：ＵＵプラザ２階　コミュニティフロア
受講者数：　２９名

Ⅰ．講義の趣旨

セミナーでは、(1) 参加者が異文化問題や国際理解教育で困っていることや関心事を出し合い、(2) 異文化理解・国際理解に関する教育について、外国人児童生徒教育における取り組み、イギリスにおける取り組みを紹介しながら、(3) ワークショップにおいて指導計画・授業を参加者全員で考えることを目的とした。

Ⅱ．講義の内容

(1) 自己紹介を中心とした交流（参加者全員）

セミナーを円滑に始めるため、講師による講義に先立ち、受講者に自己紹介と異文化理解や国際理解教育に関する各学校の取り組みや悩みを話していただいた。

(2) 外国人児童生徒教育を通じた異文化理解（丸山剛史）

自己紹介を中心とした交流の後、外国人児童生徒教育を通じた異文化理解に関して事例の紹介を行った。事例紹介では、1) 栃木県内で外国人児童理解に悩みつつも、そこから脱却していった教師の意識の変容の事例、2) 外国人児童が自分らしく、誇りをもって生活できるように母語・母文化教育に取り組む、大阪府大阪市、愛知県小牧市の教育実践事例、3) 多文化共生を志向し、教育実践に取り組む宇都宮市清原地区の二つの小学校、栃木市内の小学校における「外国にルーツのある子どもを生かす」取り組みについて説明した。これらの説明では、栃木県内でも多文化共生に向けた取り組みが行われていることを強調するとともに、「外国にルーツのある子ども」が学校にいることをいかに生かすかという教師の意識の変革が重要ではないか、と問題提起をするように話をした。

(3) イギリスの事例から：すべての子どもにとっての「言語」（森田香緒里）

1)　「言語意識学習」のワークショップ（イギリスの言語教育）

イギリスにおいて提唱された「言語意識学習」とは、言語的少数派を受け入れる側を対象にした教育で、言語的多様性への寛容を促したり、言語に関する既有知識を顕在化させたりする学習活動である。森田が日本向けにアレンジした「言語意識学習」のワークを行い、意見交換を行った。その後、イギリスの言語教育について講義した。

2)　異文化接触場面の国語教育的意義（森田香緒里）

異文化接触という経験が、日本人児童にとってどのような意味を持つのかについて、森田の調査研究を元に講義した。実際の児童の作文をグループで読み合い、作文に見られる外国人への配慮の諸相について検討した。

(4) グループ協議とまとめ

講義後、4～5 人に分かれてグループ協議を行った。グループ協議では異文化理解・国際理解教育に関して、留意したいことや教育計画について話し合っていただき、全グループに協議内容を紹介していただいた。

Ⅲ．講座の自己評価と受講者の様子

アンケート回答者 29 名中「とても満足」18 名、「やや満足」11 名だった。

自由記述では、自身のスキルアップに役立つ、他の教員との交流の機会をもてた、新たな視点を得た、新たな知見を得た、などの意義が述べられていた。具体的には次のように記されていた。

「普段仕事をしていると、教えられる機会も少ないので、夏休みの時間に余裕のある時に勉強できて、仕事のスキル、モチベーションもアップできる。」、「学校での実践例などご紹介いただいたこと、他の先生方とお話しできたこともよかった。」、「普段は『英語』を中心としての国際理解を考えてしまったため、他角度から考えることができてよかった。」、「自分の専門分野ではないテーマの研修だったため、新たに学んだことが非常に多かった。」、「とても質の高い内容の講義を聞くことができた。先進的で、新たな教育が始まっているのだと知ることができた。」など。

（文責・丸山）

「平成２９年度　教職員サマーセミナー」についてのアンケート

宇　都　宮　大　学
教　職　セ　ン　タ　ー

教職員サマーセミナーにご参加をいただき、ありがとうございました。
今後の本セミナーの改善に資するため，参加された方々から率直なご意見をいただきたく，以下のアンケートにご協力くださるようよろしくお願いいたします。

１　あなたご自身について（【１】【２】【４】は○で囲む）

【１】年齢　　２０歳代　　３０歳代　　４０歳代　　５０歳代　　その他
【２】性別　　男　　女
【３】教職経験年数　　＿＿＿＿年目
【４】現在の勤務学校種　　小学校　中学校　高等学校　特別支援学校　　その他（教委など）

２　サマーセミナーの開催をどのようにして知りましたか

【１】（　　）勤務している学校等に来ている文書（ポスター・パンフレット）で知った
【２】（　　）総合教育センターでの研修のときに知った
【３】（　　）総合教育センターあるいは宇都宮大学のホームページで知った
【４】（　　）その他（具体的に　　）

３　サマーセミナーの開催時期と期間について

【１】最も受講しやすい時期はいつ頃ですか。（複数回答可　○で囲む）

7月　　20～25 日　　26～31 日
8月　　1～ 8 日　　9～15 日　　16～22 日　　23～31 日

【２】一つの講座の開催期間はどれくらいが良いですか。（○で囲む）
半日　　１日　　１日半　　２日　　３日　　それ以上

【３】開催場所についてはどこが良いですか。
①（　　）宇都宮大学がよい
②（　　）宇都宮大学以外で開催（具体的に　　）

４　今回受講された講座の内容について

【１】受講された結果は次のいずれですか。
①（　　）とても満足
②（　　）やや満足
③（　　）やや不満
④（　　）とても不満

【裏面に進んでください。】

【２】上記【１】で「①とても満足」または「②やや満足」と答えられた場合、具体的にどのような点でそう思われたのですか。

【３】上記【１】で「③やや不満」または「④とても不満」と答えられた場合、具体的にどのような点でそう思われたのですか。

５　サマーセミナーの広報について

どのような方法で広報すればよいと思いますか。

①（　　）今の方法（ポスター・パンフレット・HP 等）で十分である。
②（　　）その他
（具体的に　　）

６　宇都宮大学が提供する研修に期待することについて

どのような内容の研修を希望しますか。具体的にお書きください。

（　　）

ご協力ありがとうございました。

平成29年度　教職員サマーセミナー　実施アンケート（受講者）　集計表

申込者数	607	人
受講者数	469	人
アンケート回答数	460	人
アンケート回収率	98.1	%

1．設問1：（1）年齢

区　分	人　数	割　合(%)	備 考
①20代	168	36.5%	38.6
②30代	142	30.9%	28.9
③40代	93	20.2%	20.8
④50代	53	11.5%	11.4
⑤その他	4	0.9%	0.0
⑥回答無し	0	0.0%	0.2
	460		

2．設問1：（2）性別

区　分	人　数	割　合(%)	備 考
①女	292	63.5%	62.9
②男	164	35.7%	36.2
③回答無し	4	0.9%	0.9
	460		

3．設問1：（3）教職経験年数

平均年数	9.4	年
（回答有り）	456	人
（回答無し）	4	人
	460	

4．設問1：（4）現在の勤務学校種　(複数回答あり)

区　分	人　数	割　合(%)	備 考
①小学校	280	60.7%	51.3
②中学校	65	14.1%	21.1
③高等学校(私立高含)	55	11.9%	7.0
④特別支援学校	51	11.1%	19.3
⑤その他	2	0.4%	0.4
⑥回答無し	8	1.7%	0.9
	461		

5．設問2：（1）開講に関する情報の入手方法（複数回答あり）

区　分	人　数	割　合(%)	備　考
①勤務している学校等に来ている文書（ポスター・パンフレット)で知った	274	57.3%	63.0
②総合教育センターで研修の時に知った	169	35.4%	26.2
③総合教育センターあるいは宇都宮大学のホームページで知った	23	4.8%	5.6
④その他（具体的に）	11	2.3%	5.2
⑤回答無し	1	0.2%	0.0
	478		

6．設問3：（1）開講希望時期　（複数回答あり）

区　分	人　数	割　合(%)	備　考
①7月　20～25	71	8.8%	4.9
②　26～31	241	29.9%	34.9
③8月　1～ 8	218	27.1%	29.9
④　9～15	87	10.8%	12.4
⑤　16～22	148	18.4%	13.5
⑥　23～31	39	4.8%	4.4
⑦　回答無し	1	0.1%	0.0
	805		

7．設問3：（2）開講希望期間（複数回答あり）

区　分	人　数	割　合(%)	備 考
①半日	176	35.7%	29.0
②1日	312	63.3%	69.5
③1.5日	2	0.4%	0.0
④2日	1	0.2%	1.2
⑤3日	0	0.0%	0.0
⑥それ以上	0	0.0%	0.0
⑦回答無し	2	0.4%	0.4
	493		

8．設問3：（3）開講希望場所　（複数回答あり）

区　分	人　数	割　合(%)	備 考
①宇都宮大学がよい	429	91.9%	92.5
②宇都宮大学以外	35	7.5%	7.1
③回答無し	3	0.6%	0.4
	467		

9．設問4：（1）受講満足度

区　分	人　数	割　合(%)	備 考
①とても満足	323	70.2%	67.4
②やや満足	122	26.5%	30.0
③やや不満	11	2.4%	2.7
④とても不満	1	0.2%	0.0
⑤回答無し	3	0.7%	0.0
	460		

10．設問5：開講の広報　（複数回答あり）

区　分	人　数	割　合(%)	備 考
①今の方法で十分	442	95.9%	96.1
②その他（具体的）	8	1.7%	1.4
③回答無し	11	2.4%	2.5
	461		

※備考の数値は平成28年度の割合(%）である。

11．記述欄

設問3（3）教職員サマーセミナーを宇都宮大学以外の場所で開講する場合の希望場所
設問4（2）「とても満足」，「やや満足」と答えた具体的な理由
設問4（3）「やや不満」，「とても不満」と答えた具体的な理由
設問5　広報について，ポスター，パンフレットの配付及びホームページへの 掲載の他にどのような方法が良いか
設問6　宇都宮大学が提供する研修としてどのような内容を希望するか

平成 29 年度　教職員サマーセミナー実施報告書
平成 30 年 1 月　発行

宇都宮大学教職センター　〒321-8505　宇都宮市峰町 350
Ｔ Ｅ Ｌ : 028-649-5272
Ｆ Ａ Ｘ : 028-649-5334
E-mail : kyosyoku@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp